

詩誌 立彩

Rissai: A Journal of Poems



第2号
2012年8月

目次

熊谷めぐみ	新しい人生は	1
	記憶	2
	黄昏時	4
朝倉さやか	金木犀	5
	追憶	6
	嫉妬	8
伊東友乃	ふしあわせの湖	9
	朝の湯浴み	10
	桜に食われて	11
栗山佳織	青梅	12
	オンカロ	13
	記憶	14
高間かさね	或る夢	16
	円相無一物	18
	三月の悲しみから	19
当津宏昭	創造者の行く末はいかに	20
	視線	21
	ボーカー・テーブル	22
戸張雅登	セールスマン	23
	家の主	24
	向こう岸は火事	25
渡辺信二	おまえの舞姿	26
	ミロのヴィーナス——K・Tにならって	27
	さらば 千手観音	28

新しい人生は

熊谷めぐみ

イスタンブールで見た朝日は忘れない
新しい人生は新鮮な野菜とともに訪れるだろう
どこにいるかもわからない神様
この街では包まれるほど身近に感じる

カップドキアに咲く色とりどりの気球の花は
安全性と高揚の折半
地下都市の迷路にまで追い掛けてきた焦燥感
はアイス屋にからかわれて飛んでいく

考えもしなかったことが起こるリゾートホテルで
夕陽が窓にシグナルを送る
エーゲ海に膝下を浸らせて
備え付けの栈橋から世界が赤く染まるのを見つめる

そうだ 明日は私が向かう方向から始まる
そして新しい人生は新鮮な野菜とともに訪れるだろう

記憶

熊谷めぐみ

空振りをした日の空の青
記憶の欠片が見せた幻か
美しさを気にして行動することなどなかった
少年であり少女だった
自由だった

半裸の太陽は生乾きで
涙に似た雨と共存していた
虹に包まれながら
誰もその後を知らなかった

冒険に繰り出した日の高揚は
戻らない面影に過ぎない
成長という言葉とともに
確かに失われた宝物があった

時は動く
ならばなぜ記憶は留まり続けるのか

錆びついた欠片をかき集めては
戻らない時を繰り返し抱きしめている

黄昏時

熊谷めぐみ

黄昏時には

心乱される瞬間がある

人ならざるものを感じとって

未知に足を踏み入れたかのように戸惑う

人は昔

橋のこちらとあちらに

異界の境界を見たそうだ

黄昏時にだけそれは姿を見せるのだと

静かな川は

夕陽に照らされ

穏やかな時が流れてゆく

橋を渡る私の心に

ふと一つの疑念がわき起こる

今日のこの時が昔と違うと言えるだろうか

この黄昏時が

金木犀

朝倉さやか

十年前 金木犀の香りの中 私は泣き顔を見せたくなくて
泣きつづける小さな私を 無理矢理 引き剥がして捨てた

それなのに 私が捨てた小さな私を 金木犀が拾って 大切に抱いていた
一年後 もう一緒に泣いてあげられるでしょうと

金木犀は あの甘い香りに包んで 私に 小さな私を返しに来た
なんてみじめな小さな私 私は顔をそむけつづけた

諦めたのか 花が落ちる頃になると 金木犀は小さな私をつれていった

それから毎年 金木犀は季節になると 小さな私をつれてきた

二年目 私は小さな私を抱いた

三年目 小さな私を抱きながら あのとき流せなかった涙を 一粒 落とした

そして金木犀が私を訪れるたび 私は少しだけ泣いた

小さな私は 金木犀の香りと一緒に 少しずつ私にとけていった

十年目 金木犀は風にのって 彼方へと旅立つ

私たち一人を地上に残して

追憶

朝倉さやか

ひと夏に一度 家族四人

山に囲まれた湖のほとりで 日の出を待った

夜明け前の空気は いつもあたりを青く染めた

だが今年は 湖面だけが黒く沈んでいる

石をつみかさねた竈に 火をおこし 鍋をかけると
カメラを取りに行ってくる と 父は車へむかう

小さなたき火 やつと湯が沸きはじめる

母が 鍋に 緑茶のティーパックをほうりこむ

父はなかなか帰ってこない

もう少し 枝をひろってきて と母に言われて
弟と私は走り出し 葦のしげみにもぐりこむ

背の高い葦に囲まれて 弟を見失う
石を踏む音が 遠ざかっていく

枝を集めて戻ると

世話をする人もなく 湯気だけが ゆらゆらと漂う
あたりの風景がかすんでいく
火は たぶんすぐに消える

私たちは どこに行ってしまったのだろう
あの朝に とけてしまった

嫉妬

朝倉さやか

私の全身

血液の流れにのって 漂っていた無数のたまご
黒い光が差した瞬間 一斉に孵ったうじ虫

あちこちで かすかに音を立てて 血管を破り
私の皮膚の下をはいまわる
手あたり次第に つまみ食い

少しずつ 私は減って うじ虫は太っていく

腕から背へと 這っていく感触
耳の奥では まだ 私をかじる音 鼻につく腐った水のおい

どんなに消し去りたくても 育てているのは私

昼も夜も 動きまわる無数のうじ虫
はやく私を食べつくしてよ 心臓の中の中まで

ふしあわせの湖

伊東友乃

午後5時のプラットホームにたつ
その女の真ん中に
ふしあわせの湖があつた

生きてきたなかで
おし殺してきたものたちが
なみなみと注がれた湖だつた

緑色の電車がやってくるたび
ざわざわとさざ波が女を誘う

いさぎよく 沈みきつてしまえば
—もう一度 生きられる—
そんな不思議にあかるい声

女の重心はじりじりと
白線のむこうをこえていく

夕陽のなか「あつ」と誰かが叫ぶ

朝の湯浴み

伊東友乃

朝もやの樹々のなか

三人の女が湯浴みをしていて

ひとりひとり 丹念に

足の指やうなじのあたりを洗っていた

あたたかな血がめぐる身体から

昨晩のできごとを剥ぐことは

女たちが 愛する儀式であつた

「あの男 ほんと最低だった」と

罵り 笑いあう 女たちの背中

羽化するまえのように白く

どこまでも透きとおっていった

遠く 山のとっぺんに

ひとつ 竜のかたちの雲がかかった

桜に喰われて

伊東友乃

わたしが食欲すぎたのか
雨あがりのなか
ついうっかり見惚れていたら

ぼんぼりに照らされた
枝に抱かれ
女の胸でいっぱいのような花にまじり
ひとつの蕾となっていた

人であったころの
肩 腰骨 足の指は
どれも喰われて土にかえり
そこいらに わたしの匂いが充満していた
その夜 濡れたいっぱいの桜のなか
わたしは 燃え 咲いて

さいごに 赤ん坊の 泣き叫ぶ声を聞いた

青梅

栗山佳織

嵐の明くる日

狭い公園いっぱい

たくさんの梅の実が落ちている

六月の梅はまだ青いが

ところどころ上気したように色付き

その染まった部分の温度が

地中にも空中にも伝わり

辺り一体が見えない蒸気に包まれている

むらのある熟し方は

わたしの気持ちのようで

転がるたびに

熱くなったり冷たくなったり

ごろごろ落ち着かない

雲の間から夏の陽が射し始め

青梅の酸い匂いに

昨夜放った一言が喉の奥でふくらみ始める

オンカロ

栗山佳織

新雪の上を一頭のヘラジカが歩いていく
時の力を押しとどめるように
ゆつくりと歩を進める

彼の足下では
多くの銅の棺が眠ることなく
信じられないほどの長い時間
死の光を出し続ける

誰もが埋めたことを忘れ
巨大な遺跡となった後も
見えない光であたらしい人々を誘惑する

ワタシタチガトリコトナッタコトヲ
カレハケツシテユルサナイダロウ

眩しい冬の光の中
足を上げるたびに
彼の蹄についた雪が
風にさらわれ飛び散っていく

記憶

栗山佳織

家の者がみんな出かけた後

祖母はこの家の中心で目をつぶり

生まれてから今までを

早送りしたり巻き戻したりしている

何度も繰り返し返す場面は

小学校から帰り

玄関に持ち物を投げ出すところ

他の兄弟たちが勉強しているのをよそに

奥から届く母親の声も無視して

毎日のように外へ駆け出していく

何があつたかなど覚えていない

友達の名前すら忘れている

曇りの日もあつたはずなのに

天気はいつも菜の花が揺れるように明るい

目を開けると

誰もいない台所はひんやりとして

何十年も誰かと一緒にいたはずなのに

ずっと一人きりだったのかもしれないと思う

こんな風になをとること

あの玄関には戻れないほど遠くへ行ってしまうことを
陽の匂いのする少女は知っていただろうか

——背後に気配を感じ振り返るけれど
そこには誰も立っていない

或る夢

高間かさね

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

円相無一物

高間かさね

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

三月の悲しみから

高間かさね

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

創造者の行く末はいかに

当津宏昭

水辺で私は一人きり
幼い頃に思いを馳せる

「この湖は、デエドラボッチの足跡なんだ」
いつの日だったか爺ちゃんが言った

「大事にしねえとバチが当たるぞ」
怖い顔して婆ちゃんも言った

今この湖はひっそりと
彼も見ただけの風景を
静かな水面に映し出す

頭に浮かぶ光景は
大男が脚を伸ばして
大地を踏みしめる姿

この土地を通ったあとで
デエドラボッチはどこ行った？

視線

当津宏昭

分かり合うため 通じ合うため

人は脳で発した感情をその両の眼に託し
視線を引き寄せ合って語らってきた

言葉を持たぬ赤ん坊がベビーカーに横たわり
歯を無くした老人が車椅子に座って
道に迷った異邦人が立ち尽くしながら
視線を飛ばし また別の視線を探す

いつ頃からか 人がこの視線を恐れ
気づいていながら顔を背けるようになった
足下と手元ばかりを見つめ

あらゆる視線を敵意のしるしと扱う！

今日もまた 無数の視線が乱れ飛び
行き場を無くして消え失せる

ポーカー・テーブル

当津宏昭

薄明かりの下 賑わうカジノ 一対一のポーカー・ゲーム
思えばこの世を生きたとは 5枚のカードに命運託して
一進一退繰り返し 一喜一憂するようなもの

賭けるチップは無制限 ジョーカーありのワイルド・ポーカー
手札が気にいらなからと 顔に出すのは愚の骨頂
眉間の皺を見過ごすような お人好しなどあるものか
ビッドかパスか？ コールかレイズか？

フル稼働する勝負勘 肌を突き刺す緊張感

たとえ大きなハンドでも 儲けがあるとは限らない

ポーカー・ゲームは皮肉なゲーム 怯んだ者から負けてゆく
時の前髪掴んだ者に 勝利の女神が微笑みかける
狙うはフラッシュ？ フルハウス？

何を残してどれを捨てるか 決断の時がゲームの醍醐味

54枚 カードが躍る

ポーカー・ゲームはまだまだ続く

セールスマン

戸張雅登

暗闇で金勘定をすると予言された少年は
五歳になって 正月の親戚宅にてセールスを試みた

禿げあがった伯父には絶対に効く育毛剤
お洒落な叔母には限定品の香水

ヘビースモーカーの大伯父には舶来の葉巻
しわが目立つ叔母には最新の化粧品

どれも家にあつた貰いもの 全て口からでまかせ
大人たちの会話を手掛かりに 欲しがるものを用意して

テレビで聞いた うたい文句を添えて・・・

「日本ではまず手に入らないでしょう」

「これがあればますます綺麗になります」

「今なら五千円のところを二千五百円で提供します」

代金を受け取った少年は 帰りの車の中
真っ暗な後部座席でお札を数えていた

家の主

戸張雅登

父は 海外出張が多いから
家に帰ると ゆったりソファに腰をおろし
充電でもしているように動かない
たまにお茶を淹れたり 煙草を吸いに台所へ
そうして深夜までテレビを見続ける

祖父が居た場所に 同じ姿勢で座る父は
同じような しかめっ面をしている
二十年後は僕もあの場所に座っているのだろうか

僕ら三代 この家で生まれ育ったから
家族の記憶はこの家とともに在る

もうすぐ祖父が 祖母を連れて帰ってくる
日頃から神棚と仏壇に手を合わせる父は
出張の前日もお盆の準備で
僕はそれを尻目に 友人たちと飲み歩く

向こう岸は火事

戸張雅登

湖の向こう岸では放火が絶えなくて

建造中の学校が 完成を待たずに崩れ落ちる

民家にも火炎瓶が投げ込まれ 焼け出された

子どもたちが 帰らぬ親を探して彷徨い続ける

ここからは 泣き疲れてできた 目の下の隈は見えず

唐突に旅発つことになった者を 送る言葉も聞こえず

この岸に 人の焦げた臭いを風が届けることもない

風の噂で知ってはいても 無力を言い訳に動かない

眠気眼を擦り 緩みきった頬と弛んだ腹で酒を仰ぐ

桜の木の傍で 宴は続き 一日が静かに過ぎていく

けれど視線の先には湖岸があつて 友と笑いながらも

避難所で暮らす子どもたちの姿が頭をよぎる

湖を越える勇氣は何年も芽生えることはなく

今年も舟に金貨を積んで送り出す

おまえの舞姿

渡辺信二

夜毎 わが夢に現れる

黒い瞳 黒い髪

おれを呪縛する白いからだと

そのなかに流れる赤い血が

空と地を繋ぎ 世界をかえして

激しく震わす命

太陽さえ奪う微笑み

項が しなやかにのけぞり

肩は 皮を剥かれた白い桃

肢体が 風を起こして

2本の小枝に交わり たゆたい 膨れ

くぼんで 溢れ ふいに ふたつの大枝へ流れ落ちる

ついに 爪先が虚空を切り裂き

舞いながら おれの定めを示す

夢に死ぬ おれは 夢に死ぬのだと

ああ おまえのしなやかさよ

ミロのヴィーナス

—— K・T にならって

渡辺信二

たとえ美のためとは言え

両腕を失うのは 代償が大きすぎる

恋人の手を握れず

考えるための頬杖もできず

膝の上で手を組んで永遠に微笑むこともない

損傷とは 世界だけでなく

自己との交渉の拒否

媒介や思考も すべて 拒否される

そうか それが 男たちの考え方か

だが たとえば 首を欠くサモトラケのニケを思え

かつて完全な性と言われた男たちこそ

今や 過剰によって 不完全な存在である

女こそ 欠落が全体を完璧にする

ミロのヴィーナス

傾きのままに厳然として 屹立する欠落

孤高の美しさがそこにある

さらば 千手観音

渡辺信二

あの津波を見ましたか 「すべてを破壊し
命を奪い 結果 絆を強める」と
そういう逆説を信じると
今なお 言うのですか

仏師湛慶ならば あなたに
あと二手加え 右手に化仏 左手に
宝戟を与えて なおも祈るに違いない

わたしは だけど 祈れない 今 なぜに
涅槃が要りますか わたしに相応しいのは
阿修羅 それこそが 死に損ねた者の道です

見つめないで あなたはもはや
一体数億の美術品 一切を空とし
是れ 空なり 空なりです

どうか もう見つめないで
わたしとこの一切の色を 忘れてください

詩誌 立彩 第2号 2012年8月20日 頒価800円

編集発行所 「立彩」

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1 立教大学ロイドホールL615 気付

印刷 第一資料印刷株式会社 TEL 03-5227-1728